The Solid Gold Cadillac における「笑い」

内 山 鉄二朗

はじめに

ブロードウェイの喜劇作家ジョージ・S・コーフマン（George S. Kaufman, 1889-1961）がハワード・タイチマン（Howard Teichmann）と合作した喜劇，*The Solid Gold Cadillac*（1953）における「笑い」の特徴を分析してみたい。

コーフマンの喜劇は，この作品に限らず，他の劇作家との合作であったが，作品数の多さと，ロングランの長さで，ブロードウェイの劇作家のなかでも傑出していた。彼の作品はその数80編を越え，そのうち20編が200回以上続演され，なかでも1930年代に発表された三作品，いずれもモス・ハート（Moss Hart）との合作であるが，*Once in a Lifetime*（1930），*You Can't Take It with You*（1936），*The Man Who Came to Dinner*（1939）は，それぞれ406回，837回，739回の記録的なロングランを達成した。コーフマンは多作であると同時に，その多くを確実にヒットさせることの出来る喜劇作家であった。

The Solid Gold Cadillac は，1950年代に発表された，最後のロングラン（526回）の新作である。実は，彼がもっとも活躍した1930年代に続く1940年代は，彼にとって不作の時期であったから，これは晩年の久々の大ヒットであった。しかも，ロングランの記録としては，彼の作品のなかで，三位にランクされた。その後，1955年に十数年も前に製作された映画 *Ninotchka*（1939）を作り直した喜劇，*Silk Stockings* を発表し，ロングラン（478回）にさせたが，それ以外はいくつかの新作を完成させたり，未完に終わらせたりしながらも，いずれも上演されることなく終わった。

The Solid Gold Cadillac は，このようなロングランを記録した，彼の代表的な喜劇の一つであったが，同時にそのような作品の最後のものとして，ゴー

ルドステーン（Malcolm Goldstein, *George S. Kaufman, His Life, His Theater*）の言葉を引用すれば，「過去において，コーフマンによって調合された，多数のプロットの反響が鳴り響いている」（436）作品でもあった。つまり，彼の喜劇，あるいは彼の喜劇の「笑い」の特徴のすべてを知ることができる作品である。

コーフマンの喜劇，あるいは彼の喜劇の「笑い」は，何故このようにロングランを記録することが出来たのか。本論では，その秘密を解明する作業の一つとして，この作品を中心にして，彼の代表作と目される，前掲の三作品にも言及しながら，彼の喜劇の「笑い」に共通する特徴を分析してみたい。

1　*The Solid Gold Cadillac* の構成と「笑い」の特徴

The Solid Gold Cadillac には，舞台に姿を現さず，声だけの語り手がいる。開幕冒頭に，その語り手がこのドラマは「おとぎ話」（1幕1場）であり，「シンデレラと四人の醜い会社役員の物語」（同）であると言う。このドラマは，確かにある大会社の株主総会において，名もない，わずか10株の株主である婦人，つまり「シンデレラ」がたまたま質問したことがきっかけで，その会社に採用され，「四人の醜い会社役員」に苛められながらも，前社長，つまり「王子様」に出会い，「四人の醜い会社役員」を追放して，副社長に抜擢され，6頭の白い馬に引かれた馬車ならぬ，「純金製のキャデラック」（2幕5場）に乗って出社する，出世物語である。

＜登場人物について＞

登場人物は，「シンデレラ」である，パートリッジ夫人（Mrs. Laura Partridge），「王子様」であるマッキバー（Edward L. McKeever）前社長，それに「四人の醜い会社役員」，つまりブレシントン（T. John Blessington）会長，メットカフ（Alfred Metcalfe）社長，スネル（Clifford Snell）副社長，それにギリー（Warren Gillie）秘書である。

パートリッジ夫人は，かつて女優をしたことがあったが，実業界にはまった

く無知で，その大会社（General Products Corporation of America）の株主総会において，業界に疎い人らしく，単純で，率直な質問をする。つまり，何故会長はそんなに働かないのに，そんなに高額な報酬を受け取っているのか，と。

そのようなことは法律にも明記してある，自明なことで，そのような質問は余りにも無知で，愚かな質問であったにもかかわらず，あるいはそうであったからこそ，四人の会社役員は彼女をどうしても説得することが出来ず，動揺する。そこで，どのような事態を招くことになるかを予測出来ないままに，もっぱら株主総会を無事に切り抜けることのみを考え，彼らは総会を一時延期し，その間に彼女を社員として傭い，懐柔しようと図る。

このドラマでは，開幕直後のこの場面においてすでに見られたように，ある世界において，その世界についてまったく無知であるが故に，悪気は無いが，愚かな人物と，逆にその世界を熟知しているが故に狡くて，抜け目の無い人物という，二種類のタイプが登場して来る。前者はその愚かさ故に同情的な「笑い」を，後者はその抜け目無さ故にシニカルな「笑い」を誘う。しかも，その両者が出会い，絡み合って，それぞれの「おかしさ」を増幅するだけでなく，抜け目のない筈の人物が愚かな筈の人物にやり込められるので，抜け目の無い人物に対する「笑い」が，さらに風刺的な「笑い」になる。

＜プロットについて＞

開幕冒頭で，このドラマは「シンデレラ」の「おとぎ話」であると，語り手によって断られていた。確かに，始めささやかな株主であったパートリッジ夫人が，最後に1,700万株の代理委任状を与えられて副社長になるプロットは，しかしと言うべきか，当然と言うべきか，偶発的な事件とか，誰も予測しなかった事態の発生など，思いがけない出来事によって展開する。

例えば，終幕近くの場面の株主総会で，「四人の醜い会社役員」はパートリッジ夫人の発言は支持されないので，彼女を恐れる必要がなくなったと判断し，彼女の首を切る。ところが，彼女は会社の株主連絡担当役員にされていたが，

その仕事の重大さを認識することもなく，多くの株主から来た手紙に一通一通丁寧な返事を書いていた。そのことで多くの株主から信用され，1,700万株の総会での代理委任状を郵送されていたことが判明する。その時点でも，彼女はことの重大さを認識していなかったが，マッキーバー前社長に教えられて，ようやく気が付く。そこで，その代理委任状を使って，株主総会で「四人の醜い会社役員」を解任し，彼女が副社長になり，前社長を社長に復職させる。

そのように，プロットは偶発性，意外性を伴った，より好ましい方向への事態の急変，あるいは逆転という展開を示すことによって，「笑い」を引き起こす。

＜舞台について＞

このドラマの舞台は，会社の事務所と，一部はマッキーバー前社長のいる，ワシントンの政府高官の事務所などである。いずれも，パートリッジ夫人にとって，未知の世界である。そして，その世界に無知であるが故に愚かな言動を取る彼女と，その世界を熟知しているが故に抜け目のない言動を取る人々が出会って，彼らとその世界が「笑い」の対象にされる，そういう「場」なのである。

例えば，すでに指摘したように，開幕冒頭の株主総会における，彼女の質問の場面がそうである。それから，彼女が会社の株主連絡担当役員として，彼女の方からも積極的に株主に手紙を出して，そのことで株主の信用を得て，最後に大逆転を引き起こす場面も，それに当たる。さらに一例を挙げるならば，彼女がワシントンの政府高官をしている，前社長のところへ派遣されて，彼に会った場面も，同様である。

ワシントンの政府高官の事務所，つまり政治の世界は，彼女には未知の世界である。そこにいるマッキーバー前社長は，絶えずかかって来る厄介な電話や，署名を求めに来る秘書や，何かというと彼を呼び出して説明をさせる上院の会議に悩まされ，腹を立て，気が狂いそうだと，わめいている。彼女はそれを聞いて，そんなことならば断ったらどうですかと進言し，彼がそんなことは出来ないと説明すると，それなら辞めたらどうですかと言い出して，彼を唖然とさ

せ，「笑い」を誘う。

このように，舞台はその世界をよく知っている人物と，まったく知っていない人物が出会って，そのことで両者が「笑い」の対象となるような行動をする「場」である。そして，そこはその行動によって，その世界をよく知っている人物には気付かれず，その世界をまったく知っていない人物によって顕在化される，潜在的な「おかしさ」を持っている「場」でもある。つまり，そこは，人物に対する「笑い」が，同時にその世界の「おかしさ」に対する「笑い」でもあるような，そういう「場」である。

以上で，*The Solid Gold Cadillac* の構成と「笑い」の特徴を調べてみた。とすると，この喜劇は多分にファルス（farce）として作られており，その「笑い」はファルスの「笑い」であることがわかる。

喜劇，あるいはファルスの「おかしさ」と「笑い」について，ベルグソン（Henri Bergson, 1859-1941）が『笑い』（*Le Rire,* 1900）の中で，興味ある定義をしている。それを要約すれば，登場人物の心と肉体が，生きている「しなやかさ」（林達夫訳『笑い』，19）や「屈伸性」（同）を失い，「こわばって」「機械的」（52）になった時，あるいはそのような人物が動かしている世界が，同じようにして「こわばって」「機械的」になった時，「おかしさ」が生まれ，「笑い」を誘うのである。「おかしさ」は，そういうものであり，「笑い」はその「おかしさ」を笑うことによって，観客が彼らの心と肉体がそのように「こわばって」「機械的」にならないように充分注意し，生きた「しなやかさ」と「屈伸性」を維持し，回復しようとする働きである。

喜劇，あるいはファルスの「おかしさ」と「笑い」が，そのようなものである時，*The Solid Gold Cadillac* の「おかしさ」と「笑い」は，まさにそのようなものであることがわかる。そして，それらの特徴は，程度の差こそあれ，彼の他のドラマにも共通して見られる特徴である。

2 他の作品との比較

＜*Once in a Lifetime*との比較＞

Once in a Lifetime は，モス・ハートと合作した前掲三作品の中で，その構成において *The Solid Gold Cadillac* にもっとも近いが，よりデタラメで，愚かで，若々しい「笑い」を引き起こし，陽気で，騒々しいファルスになっている。

ジョージ（George Lewis）を含む三人組が，未知の世界であるロスアンゼルスの映画製作の世界へ東部から遙々やって来る。ジョージはパートリッジ夫人のように，その世界に無知な，しかしもっと愚かな人物である。ところが，その世界を熟知した「四人の醜い会社役員」のような，しかしもっと堂々とした超大物映画製作者（Heman Glogauer）によって，彼は映画製作にはまったく無知であるにもかかわらず，思いがけなくも映画監督に抜擢される。そして，彼が監督したひどい映画が，思いがけなく大ヒットしたり，彼がうっかり購入契約した2,000機の飛行機に買い手が殺到したりして，登場人物の誰もが予想しなかった，意外な事態を発生させ，彼に対する「笑い」を引き起こす。同時に，その「笑い」は，ロスアンゼルスの映画製作の世界に潜在する「おかしさ」に対する「笑い」でもあって，それをジョージは自覚しないままに，顕在化させ，その世界のデタラメさに対する辛辣な，風刺的な「笑い」を作り出している。

＜他の二作品との比較＞

The Man Who Came to Dinner もまた，予測せざる偶発的な事態の発生によって，賑やかなファルスになっている。「四人の醜い会社役員」のような，しかし彼らほど，愚かでも，醜くもない，マスコミ界の著名人，シェリダン・ホワイトサイド（Sheridan Whiteside）が，招待された家の玄関先で，氷に滑って転んで動けなくなり，車椅子に乗せられて，その家で治療をすることを余儀なくされる。ところが，車椅子に縛られて，動きが取れない生活をしなければならない，その小さな普通の家は，国の内外を忙しく駆け巡っているホワ

イトサイドにとって，まったく未知の世界である。この未知の世界に無知な余り，彼はそこでの振る舞い方を知らず，威張り散らし，癇癪を起こし，人々に手を焼かせて「笑い」の対象となる（もっとも，最後にそのような自分の姿にある程度気付くが)。その「笑い」は，そのようなマスコミ界の著名人の俗物的な言動とその世界に対する，辛辣な，風刺的な「笑い」になっている。

You Can't Take It with You もまた，活気溢れるファルスである。家族や友人たちが，同じ部屋でドラマを書いたり，バレーを練習したり，木琴を叩いたり，印刷機を動かしたりし，また地下室では花火を作ったりして，勝手気儘に暮らしている。マーチン・ヴァンダーホフ（Martin Vanderhof）の，一風変わった家に，「四人の醜い会社役員」のような，しかし彼らと違って，もっと有能であり，賢明な，大物実業家カービー氏（Mr. Kirby）が，息子の結婚相手の家族に会うために訪ねてくる。彼にとって，ヴァンダーホフ家はまったく未知の世界である。すると，その家の地下室で製造されていた花火が暴発したり，誤って彼がその家族の人々と一緒に警察に逮捕されて，留置されたりして，偶発的な，予想外の事態が発生し，「笑い」を引き起こす（最後に，留置場から出て来たカービー氏は，彼の知らない貴重な生き方があり，そういう生き方をする人々の世界があることを，マーチンによって教えられるが)。その「笑い」は，カービー氏によって代表されている実業界，つまり情け容赦のない弱肉強食の世界をきびしく風刺する「笑い」になっている。

繰り返すならば *Once in a Lifetime* のように，中心人物であるジョージが，パートリッジ夫人のような場合には，そこへやって来た人々によって，そこにいる人々とその世界が「笑い」の対象にされる。それに対して，*The Man Who Came to Dinner* や *You Can't Take It with You* のように，中心人物であるホワイトサイドやカービー氏が，それぞれ「四人の醜い会社役員」のようなタイプの場合には，そこへやって来た人々とその世界が，そこにいる人々によって，「笑い」の対象にされる。このようにして，*Once in a Lifetime* や *The Solid Gold Cadillac* の舞台と，*The Man Who Came to Dinner* や *You*

Can't Take It with You の舞台は，それぞれ裏表の関係になっているが，そのことによって「笑い」の対象にされている人々とその世界の「おかしさ」がきわめて効果的に顕在化されている。

3 「恋人」としての登場人物

コーフマンの喜劇では，ファルスの特徴として，登場人物はほとんど何時も自分が何をしているかについて無知であり，無自覚である。その上，プロットは登場人物の誰もが予測しなかった，偶発的，突発的な事態の発生と，それに伴う事態の急変，あるいは逆転によって展開する。

しかし，自分がやっていることに自覚的な登場人物と，そのような人物による自覚的な行動に基づくプロットの展開が，まったくないかというと，そうではない。その代表的なもの，あるいは唯一のものとして，部分的であっても，恋人たちと，恋人たちの行動に基づくプロットの展開がある。

例えば，*Once in a Lifetime* において，映画監督のジョージョと女優のスーザン（Susan Walker），*The Man Who Came to Dinner* において，新聞記者のジェファソン（Bert Jefferson）と秘書のマギー（Maggie Cutler），そして *You Can't Take It with You* において，実業家の息子のトニー（Tony Kirby）とヴァンダーホフの孫娘のアリス（Alice Sycamore）といった恋人たちとその行動が，それである。

The Solid Gold Cadillac においても，そのような恋人たちとして，郵便物担当の社員ジェンキンズ（Mark Jenkins）と，パートリッジ夫人の秘書（Miss Shotgaven）が登場する。二人ともパートリッジ夫人の活動に協力して，特にジェンキンズは「四人の醜い会社役員」と殴り合いをし，首にされながらも，株主総会の代理委任状が同封された，大勢の株主から送られた沢山の手紙を彼女に届ける。それらの委任状を行使することによって，彼女は「四人の醜い会社役員」を追放することが出来た。

さらに，ゴールドステーンによれば（439），パートリッジ夫人とマッキバー

前社長も，このドラマの製作の初期の段階では，恋人として設定されていたと言う。とすると，彼が彼女と出会って，ワシントンの政府高官を突然辞任し，「四人の醜い会社役員」を追放する戦いに参加した事態も，それほど「突然」ではなくなり，このドラマはシンデレラの「おとぎ話」に，いっそう近い物語になる。それがそうならなかったのは，舞台で彼女と彼を演ずる俳優たちの年齢に大きな開きがあり，恋人同士としては不自然であり，観客の評判もよくないであろうという，公演上の判断があったからのようである。それにまた，二人までが恋人同士では，余りにもメロドラマチックになって，こっけいな人物ではなくなって，ドラマの展開に支障を来すことも考えられる。

ともあれ，このようにコーフマンのファルスにおいて，恋愛は貴重な役割を果たす。笑わざるを得ないような人物ばかりが住み，笑わざるを得ないような突発的な事態によってのみ動く，笑う以外になすすべがない世界において，恋愛によってのみ，人々は不完全であっても，「機械的な」「こわばり」を捨て，生きた「しなやかさ」と「屈伸性」を回復し，「笑い」の対象とならない人物になり，そして「笑い」の対象とならない行動を取るとが出来，またそうであろうと努力ることが出来るからである。

さらに，恋人たち，あるいはそれに近い人物たちは，しばしば劇作家や俳優など，演劇にかかわっている人たち，あるいはそれに近い人たちであることも，注目に値する。例えば，*Once in a Lifetime* において，ジョージとスーザンは俳優であったし，*The Man Who Came to Dinner* において，ジェファソンは劇を書いていたし，*You Can't Take It with You* において，アリスの母（Penelope）も劇を書いていたし，さらに*The Solid Gold Cadillac* において，恋人になり損ねた二人，パートリッジ夫人はかつて女優であったし，マッキバー前社長は，かつて俳優志望であったことを，彼女に打ち明けている。もっとも彼女は，彼が俳優にならなくてよかったと言っているが。これも，彼が俳優であったならば，よりこっけいでない人物になるので，彼女の言葉はきわめて示唆的である。

このように「笑い」の対象になっている世界において，何かを希望し，期待することが出来るものがあるとするならば，それは恋人たちか，演劇にかかわっている人たち，あるいはその両者であり，その人たちの行動であると，コーフマンは考えているようである。演劇にかかわっている人たちに対する，演劇人コーフマンの信頼，あるいは期待の大きさを知ることが出来る。

それにしても，その人たちの出来る，最大限の行動は，「笑い」の対象となっている世界を，そうでない世界に変革することではなくて，トニーやマギーのように，その世界から出来るだけ遠く離れること，つまり逃亡することであった。ここにも，アメリカ文学の登場人物たちの伝統的な行動パターンを見ることが出来る。

4 *The Solid Gold Cadillac* の「結末」について

最後に，*The Solid Gold Cadillac* の「結末」について触れておきたい。

株主総会において，パートリッジ夫人とマッキーバー前社長が「四人の醜い会社役員」を追放した後，一人の老婦人が立ち上がって「質問があります」（2幕6場）と言うと，パートリッジ夫人は「それは私が始めたやり方です」（同）と答えて，ドラマの冒頭の場面で，「四人の醜い会社役員」が彼女に対してやったのと同じように，直ぐ総会の延期を宣言する。

この場面は，「笑い」を引き起こす。それはドラマが，突然最後の場面で最初の場面へ戻ったという「驚き」が生む「笑い」である。*The Man Who Came to Dinner* の最後の場面においても，再び同じ家の玄関先で，ホワイトサイドが滑って転び，その家の中に担ぎ込まれ，最初の場面に戻ってしまい，「笑い」を引き起こすのと同様である。

しかし，これら二つの場面において，ホワイトサイドの場合は，同じ人物が同じ場所で，同じ行動を繰り返したことに対する「笑い」であるが，パートリッジ夫人の場合は，同じ人物が同じ場所で，違った行動をしたことに対する「笑い」である。つまり，彼の場合は，最初からその行動が「笑い」の対象である

人物が，最後に同じ行動をしたことに対する「笑い」であるが，彼女の場合は，最初彼女によって「笑い」の対象にされていた人物の行動を，最後に彼女自身が真似てしまったことに対する「笑い」である。

従って，パートリッジ夫人の場合は，ホワイトサイドの場合よりも，彼女に対する「笑い」はよりシニカルになる。彼女は小株主から副社長になってしまうと，結局彼女自身も前の役員たちがやっていたのと同じ行動を取る，あるいは取らざるを得なかった，と。

しかし，彼女に対してもう少し同情的な見方をすべきであろう。彼女がかかわっていた世界において，彼女はほとんど何時も受け身で，自分自身がやっていることの意味が，最後までまったくわかっていなかった。彼女は単純で，悪気はないが，その世界にまったく無知な，そういう意味で愚かな婦人に過ぎなかったからである。

このドラマで行なわれていることは，その世界に熟知している，狡猾な四人の会社役員と，それ程でないにしても，かつてはそうであった前社長との間の，会社の支配権を奪い合う，激しい戦いであった。彼女はその戦いに巻き込まれて，両者から利用されただけの，その世界に無知な愚かな人物である。しかし，そういう愚かな人物であることによって，はしなくも彼女は，その世界を熟知している，愚かでない筈の「四人の醜い会社役員」と前社長をきりきり舞いさせ，彼らの世界，つまり実業界の「醜さ」を暴露している。彼女は彼女自身に対するシニカルな「笑い」を誘いながらも，彼らと，彼らの世界に対する，風刺的で，辛辣で，より大きな「笑い」を引き出すのに成功していたのである。

それでは，開幕冒頭で語り手によって紹介された「おとぎ話」，つまり「シンデレラと醜い四人の会社役員の物語」はどうなるのか。終幕直前の場面で，語り手は「シンデレラは……王子様と腕を組んで，今度は地下鉄でなくて……純金製のキャデラックに乗って……ダウンタウンへ出勤しました」（2幕5場）と，説明する。しかし，そうでありながらも，副社長になった彼女の株主総会での言動がはしなくも示しているような，彼女がその「世界」から離れな

い限り，再び同じ「醜さ」が繰り返される恐れのあることが示唆されている。このドラマはリアリスティックでペシミスティックな，現代の「おとぎ話」になっている。

確かに，モス・ハートと合作した三作品に比較して，この場面だけに限らず，*The Solid Gold Cadillac* を，とりわけリアリスティックに描こうとする配慮は，随所に目に付く。そして，そのようにリアリスティックに描くことによって，それら三作品に潜在していたペシミズムを，この作品で顕在化させたと見ることが出来る。なお，ゴールドステーンによれば（441-442），コーフマンはこの作品に『出口なし』（*No Exit*）というタイトルを付けて，サルトル（Jean Paul Sartre, 1905-1980）の同名の作品と同じように，「シーリアスな」ドラマにしようと考えていたようである。

ともあれ，リアリスティックに，そしてペシミスティックに，ドラマを描こうとする配慮は，賑やかで，陽気な，活気溢れるファルスであった、モス・ハートとの合作喜劇には見られないものであった。そのような配慮によって，*The Solid Gold Cadillac* は，なおもファルスとしての生気を保っているものの，失ったものも少なからずあったように思われる。巧みなファルスを次から次へとヒットさせて来た喜劇作家としてのコーフマンに，その曲がり角，つまりその幕を下ろす時期が迫っていたと思わざるを得ない。

テ キ ス ト

George S. Kaufman, *The Solid Gold Cadillac*, in *Best American Plays: Fourth Series, 1952-1957*, ed. John Gassner. New York: Crown, 1958.

Kaufman, George S. and Moss Hart. *Six Plays by Kaufman and Hart.* Introduction by Brooks Atkinson. New York: Moden Library, 1942.

参 考 文 献

Goldstein, Malcolm. *George S. Kaufman, His life, His Theater.* New York: Oxford University Press, 1979.

Mason, Jeffrey D. *Wisecracks, the Farces of George S. Kaufman.* Ann Arbor: UMI Reseach Press, 1988.

Pollack, Rhoda-Gale. *George S. Kaufman.* Boston: Twayne Publishers, 1988.

ベルグソン著／林　達夫訳　『笑い』（岩波文庫）岩波書店